

栃木県結核・感染症発生動向調査情報(サーベイランス)

令和6(2024)年4月(週報第 14 週～第 17 週(4/1～4/28))集計の感染症発生動向調査情報に関する解析結果は次のとおりです。

1 感染症解析情報 [4月は4週間、3月は4週間、前年同期は4週間での比較となります。]

(1) 定点把握疾病情報

ア. 定点把握疾病のうち、週報疾病(インフルエンザ/COVID-19、小児科、眼科、基幹定点における対象疾病)は 3,990 件(定点あたり 16.60 件/週)であり、3月の 8,255 件(定点あたり 30.17 件/週)と比較し、0.55 倍とかなり低い水準で推移しています。

イ. 栃木県において報告が多かった主な疾病は次のとおりです。

疾病名	報告数	前月との比較(週あたり比)	前年同期との比較(週あたり比)
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)	1,309 件 (週あたり平均 327.25 件)	↓ (0.69 倍) 前月は 1,906 件 (週あたり平均 476.50 件)	↑ 参考値 (2.69 倍) 前年同月は 487 件 (週あたり平均 121.75 件)
インフルエンザ	1,145 件 (週あたり平均 286.25 件)	↓ (0.23 倍) 前月は 4,998 件 (週あたり平均 1,249.50 件)	↑ (2.42 倍) 前年同月は 473 件 (週あたり平均 118.25 件)
A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎	737 件 (週あたり平均 184.25 件)	↑ (1.19 倍) 前月は 620 件 (週あたり平均 155.00 件)	↑ (8.38 倍) 前年同月は 88 件 (週あたり平均 22.00 件)

- ① **新型コロナウイルス感染症**は、前月に比べ報告数が 0.69 倍とかなり低い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 2.69 倍と大幅に高い水準で推移しています。なお、令和5年第 18 週以前のデータは、感染者数のデータを基に、定点当たりの報告数を集計したものであり、参考値となっています。
- ② **インフルエンザ**は、前月に比べ報告数が 0.23 倍と大幅に低い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 2.42 倍と大幅に高い水準で推移しています。全国的には、過去 5 年間の同時期と比較して、やや高い水準で推移しています。
- ③ **A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎**は、前月に比べ報告数が 1.19 倍とやや高い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で 8.38 倍と大幅に高い水準で推移しています。全国的には、過去 5 年間の同時期と比較して、大幅に高い水準で推移しています。

(2) 全数(1～5 類)把握疾病情報

ア. 1 類、2 類、3 類疾病及び新型インフルエンザ等感染症(全国)
結核 1,147 件(3月 1,193 件)、細菌性赤痢7件(3月4件)、腸管出血性大腸菌感染症 118 件(3月 115 件)、腸チフス5件(3月3件)、パラチフス1件(3月0件)の報告がありました。

イ. 4 類・5 類(上位 6 疾病)(全国)

順位	疾患名	件数	前月件数
1	梅毒	1,056	1,051
2	侵襲性肺炎球菌感染症	224	175
3	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	177	164
4	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	154	130
5	百日咳	105	41
6	レジオネラ症	103	120

ウ. 栃木県では次の報告がありました。(計 53 件)(3月 43 件)
結核 13 件、腸管出血性大腸菌感染症2件、レジオネラ症3件、アメーバ赤痢1件、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症4件、クロイツフェルト・ヤコブ病1件、劇症型溶血性レンサ球菌感染症1件、後天性免疫不全症候群2件、侵襲性インフルエンザ菌感染症1件、侵襲性肺炎球菌感染症1件、水痘(入院例)3件、梅毒 19 件、播種性クリプトコックス症2件

※本解析評価は、速報性を重視しておりますので、今後の調査などの結果に応じて、若干の変更が生じることがあります。

2 疾病の予防解説（A群溶血性レンサ球菌咽頭炎）

A群溶血性レンサ球菌によって引き起こされる上気道感染症です。

いずれの年齢でも起こり得る感染症ですが、特に幼児期から学童期の小児に多く見られます。

適切な治療をすれば予後は良好ですが、合併症としてリウマチ熱や腎炎などを起こすことがあります。合併症の予防のためには、症状が消えた後も、医師の指示どおりに最後まで抗菌薬を飲み続けることが大切です。

発生状況としては、「冬」及び「春から初夏にかけて」の2つの時期に流行することが知られています。県内では昨年の秋以降、例年の同時期と比べて報告数の多い状況が続いておりますので、今後も発生動向に注意するとともに、引き続き予防対策を心がけましょう。

疾病名	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎
症状	潜伏期間は2～5日間です。 突然の発熱や咽頭痛、全身倦怠感、嘔吐、莓舌（莓状に腫れ上がった舌）等の症状が見られます。通常、発熱は3～5日以内に下がり、1週間程度で症状は落ち着きます。 まれに、菌が産生する毒素により、全身に赤い発赤が広がる「猩紅熱（しょうこうねつ）」を起こすことがあります。 また、合併症として、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などに発展する場合があります。
感染経路	主な感染経路は、感染者の咳やくしゃみ、会話の際の飛沫を吸い込むことによる「飛沫感染」や、ウイルスがついた手で目や鼻、口を触ることによる「接触感染」です。 患者との接触により感染が広がるため、ヒトとヒトとの接触の機会が増加するときに罹患しやすく、家庭、学校、保育施設などでの集団感染が多くみられます。
予防・感染拡大防止対策	○患者との濃厚接触を避けること 職員を含め体調不良者は出勤・登園を控えましょう。 ○うがい、流水・石鹸による手洗い、アルコール消毒 外出後のうがい、手洗いを徹底しましょう。 ○咳エチケット マスクを用いた咳エチケット（咳やくしゃみを発する者が周囲への感染予防のためにマスクを着用すること）も効果が期待できます。
治療	抗菌薬による治療が行われます。 リウマチ熱や腎炎などの合併症を予防するためには、症状が消えた後も、医師の指示どおりに最後まで抗菌薬を飲み続けることが大切です。 喉の痛みがひどい場合は、刺激の少ない柔らかく薄味の食事をとるようにし、水分補給を心がけましょう。

（疾病の予防解説 参考）

- ・国立感染症研究所 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎とは
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/340-group-a-streptococcus-intro.html>
- ・国立感染症研究所 IDWR 2023 年第 43 号<注目すべき感染症> A群溶血性レンサ球菌咽頭炎
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/pneumococcal-m/group-a-streptococcus-idwrc/12361-idwrc-2343.html>
- ・厚生労働省 保育所における感染症対策ガイドライン
<https://www.mhlw.go.jp/content/001005138.pdf>

※予防解説は一般的なことを記載していますので、不明な点は主治医によく相談するようにしましょう。

3 その他の参考事項

国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムにより、4月に県内で警報および注意報が発令された感染症はありませんでした。

※国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムは、過去の週ごと・保健所ごとの届出数に基づき、届出数が特に多いとき（およそ上位1%以内）に警報が発生されるよう、疾病ごとに定点当たりの基準値が定められたものです